

○後藤さゆり* 在塚礼子**

(*埼玉大・院 **埼玉大)

目的 本研究は、住環境教育の在り方を探る上でボルノー教育学が有効であることを明らかにすることを主論とし、その試論としてボルノーのいう「所有的空間」として認識している住意識の特徴を、原風景を手がかりに明らかにすることを目的とする。

方法 1. ボルノーのいう「所有的空間」として住環境を認識することが、感性を育む体験学習を重視する住環境教育に有効であることを考察する。2. 「所有的空間」「志向的空間」として認識している住意識を、原風景、好きな場所及び住みたい場所としての意識から捉えることにより、「所有的空間」として認識している住意識の特徴を明らかにする。

結果 ボルノーは住環境を「体験された空間」として論じ、人間にとって真に住むために重要な空間の認識は行動の利便性などに結び付いた「志向的空間」としての認識とは異なり、「所有的空間」において庇護性を獲得することであると述べている。「所有的空間」とは人間と空間が主体と客体とに未分化な状態であり、その関係は「心は身体に居住することと同様の緊密な関係である。つまり「所有的空間」で見守られているという庇護性を獲得することによって、「内部空間」を持っていると認識することが住むことの意義である。原風景から捉えた「所有的空間」の特徴は①空間的魅力、自然、人間関係が、人間と複合的に結び付いて一体化した空間を示す。②見守られている、安らぎという庇護性を示す、またはその必要性を示す。③「志向的空間」は重視されない。「好きな場所」では空間的魅力が突出し、全体として「所有的空間」の特徴を表現しているが庇護性を示す表現は減少する。「住みたい場所」では「志向的空間」に対する表現が圧倒的に多く存在する。